



^13  
4440  
6



4440  
6



キニ全傳 駿河舞卷之六

十八齣 宇津の山越

却説風早尤京ハ熱田明神の告よらて駿河三穂がきたよ  
 つこり漁夫伯寮が家よあよりて電裳羽衣の森田秘交  
 に傳まを残りしり搜るのこりつび乙女を要る葎踊の寸音  
 あくよらまバウこる尺魔生むる浮世の光景あて赤山  
 伯寮ハ賊首の爲よ害せしを判秘書の申分を棄ひ立  
 退し其敵の行去を尋んとて伯寮の追福もそこよら  
 いそ先何因をやんじて弁長せんと後縁不足ハ的るれ  
 茶をばえふつよはりげごる宇津の山中ハ強盜多し他個



キニ全傳卷之六

〇一



又由人日ハ往來も稀まれして家いえとハ挑販てうはんのた生せい  
 の妨さまたとさまり旅人りょじんも其心そのこころ均ひとすめと懇げんは詰つるた京きやうを  
 其風そのふう声こゑをかげてまはるた京きやうのた一いつ宿しゆくせんと定さだめられ  
 とて礼れいをおるのの漢子あしこ又またハ旅人りょじんハ何なにのどこよりか  
 や家いえもなのの貴地きちのた名物なぶつ宇津うづの山やま乃なり十圍子じゆゐしとて  
 由よし見み又また麻あしのた結むすつる以もて十粒じゆりやくを一連いちれんとしたらは十圍子  
 といひまりつりゆる一連れんめをまるたまと進すすむた京きやう是こゝを  
 見みてふ家いえといひかりのあり例年れいねん四し月げつ中ちゆうの六日ろくにちは三井  
 寺じはせんだん禪ぜんを修行しゆぎやうの日出いづる人ひと子こあらずといひてお  
 子こ一いつ子し成なり俵ひらりて糸いと詣よりて又またハ十圍子じゆゐし乃なり十圍子じゆゐし

として町まちの名産なみんといはる都みやこの土産つちのたみん一連いちれんのた産たみんといひて能  
 袋ふくろの裡うちより單錢たんせんを摸もむと圍子ゐしをおてつりやうと下  
 が過刺あせ措そくまり盗賊たうそくのた栖すまハ何圍なんゐはありやあらずはや  
 何なんまりたらば尋たづねをまるたら漢子あしこ遠とほくた地ちあらずを指さして  
 何なんまりたらば一際いつざい茶ちやのた狭間せまは蘿のた庵あん然ぜん然ぜんび  
 て住すむはしる人ひと傳つたへの水みづをおもかります至りしるのありといふ  
 旅人りょじんも早く道みちを急いそぐといふつて遂つひは別わかれて若わかく  
 て去いりし貴きは一個いっごうの旅人りょじん喘氣ぜんき呼よぶ的血眼けつがんは成なりて跑はう  
 来きり回思をんまりた京きやうは向むかひ今此所こゝへ一人ひとりの賊漢あしこ  
 ありしびやといひた京きやうを十圍子じゆゐしをおもかりしる漢子あしこ

一個毒を食ふの事をして、身て賊へあつたるなり、旅人が其其漢  
子こそ、則ち此賊を食ふ某藤よて、彼が園子を食ふるは  
宣料や毒茶を用ひ、よや片時の程は、忽ち殺す乃  
生血を吐て、已に一命を害せり、幸某身は、其  
方が解毒茶を賜ふる、人危き性命、保まらざると、只  
ども、遂は行、毒子に奪れ、彼賊、未だをく、の走るまじと、  
心を、あまぐ、り大に、火を、煮て、親けま、バ、龍京、齋て、其  
も、起先、彼が園子を、食ふる、今、は、於て、恙、汝、親  
某、全く、信せざる、なり、旅人、の、心、を、さ、く、バ、客、も、賊、の、爲  
に、欺る、事、旅、人の、恙、も、少、回、毒、氣、水、を、飲、み、危

う、も、其、今、一、歩、お、ま、り、ま、り、バ、必、非、命、に、死、せ、ん、傍、侍、氣  
茶、の、良、丹、を、残、て、此、は、在、ら、れ、と、あ、ら、る、迷、り、用、て、毒  
氣、を、研、り、入、り、て、懐、を、さ、ぐ、り、て、一、煉、の、丹、茶、を、仰、あ、え、  
某、ハ、彼、賊、を、退、ん、と、欺、り、て、心、を、さ、く、バ、少、刻、も、此、は、程、極  
ま、り、て、な、や、告、別、し、り、と、つ、ひ、は、け、れ、は、く、強、り、行  
んと、する、を、察、し、て、懐、へ、懐、死、伴、賊、は、一、歩、も、動、き、ず、  
己、身、の、毒、人、が、無、音、も、命、息、を、と、思、ひ、由、り、と、  
食、物、も、其、ま、り、必、打、捨、つ、園、子、ハ、原、來、毒、汁、に、て、  
其、身、も、ゆ、り、却、て、解毒、茶、の、う、ら、は、砥、石、を、研、獨、り、の  
毒、を、の、ら、ゆ、る、古、め、り、き、斗、略、は、う、く、を、あ、き、某、も、ん、



盗徒

六十八 舞の八十八



宇津の山越

風早元京之介

六十九 舞の八十九

察する不汝も霜雲太郎が部下のん自状せしと罵  
 ばい昔何方より蹄苗の印きよほきて八方より小城をも  
 取るかた京をめぐり討平うまを身を因うしを逃  
 平快両口の腰刀を引抜双のよは打揮て相向ひ互に  
 鋒を交て闘り原素九京之介の能双刀をけし  
 精く劍法は通下しは盗賊ども命を際し徳智  
 を奮くくともいふ敵もろりしふをいれ肩向  
 大割腹をけりし肩先より膝をうけく両腕はれ  
 池上は操地と倒を伏え残る部下は叶りて陰  
 路ををく地は遊行を何ふまごのりと悲しくは且統

大樹の松の宵より一個の大漢はくはをいれ肩向  
 黒巾を裹し身は白服を穿たり此大漢は頭を  
 て四辺を伺ひ瞿として箇の龍洞をおるるを倣て  
 回身して宵はか九京之介はけし身をく地よりより  
 弛度り山城やれと斬落る昔は面前の路回より敵  
 蕙として一道の山氣滾起り旁深きうらまの城を  
 伏陣をく膝を蹴りて其去向をうらまをくとも  
 大空はけり地中をくふ樹を有すと彼を是を  
 尋らうら一声漂と強音印き一枝の葉を吹きて九京  
 の肩尖を搦て後山の松乃樹の中より九京をく

危うくと呼り今け着を射方も必彼城の石居りん軍は  
披し捕へんその名の末きる山を的に跳去り始終を疾と  
伺ひて茂林を渡る一個の修繕者斬伏らまて山城の傍中  
まより別着をたふし死骸を難く踏躓して臥を踏き捉取  
陰を地よま立てたつちと倒さる方をそれごとく根を萱  
原いひりて遂は一條の同道は降とてたどりぬ

十九勅 藤葉の巢穴

去程は修行者八露はた鳥の細道をわらふ山城の巢穴を  
入るは堅固の要害よて不虞の故を汲て是の膳をたたく  
五人竺のどた城は四個を子とえしして下りし修行者

路の傍は跪き平を束ひて是は紀楚尔老く新下より密  
度を告まるとる来たりとふ城徒眼あやめて何中ん呼  
あやうが別まで別着ありやと問ふ修繕者はありと  
傍中よりたふしをば検みて像は剣をひらきとる来れり  
傍引ひた谷はゆる危険く程より城門はむる石壁十  
丈の渾は自然の岩は切を五重の言指ハ石と多うて  
城門洞狭の固あり衝門堅固の者准何を唱へ柳木  
巖は打ちし花奥はゆるし又回毎の結搦金玉を傍にあり  
たまども城の眼射のあたる強壁のこ敷多は指まらんと  
ぞ城首が花奥の席とおぼくして根幅の光輝くとして



霜雲太師搖如也巴部下の城を一日は攻めぬは  
 若も陸てそ骨柄をせんた七人有余る男の面赤く  
 両方へ生まの眸送は割るるが因得の上は中へ振具は押  
 かりと係は鼻ぐとこりて老父が部下を修大をく究  
 ころり候ゆ若たるるは忍入小子の九及の必司代は仕友  
 あり而候をも知りてはが世は又よつて流落しギノニ老  
 の部下は身を扱へばは家事の役をせりう候ゆ  
 若は打扮刻着を持てありつりとぞりける城首は  
 て迫くもを至せんと呼まは候ゆ若はすりかてはまを  
 戴るんとするおとち力に抜手も刃各ばと斬りける

花より通あるは平伏を霜雲太師大は酌河大矢  
 備は室町家よの捕收ももつりごりよまをそまより度席  
 孤や弱冠の時より幼のこく飲食をそのこは沈  
 尸や父の勅氣をえて東を西海奥羽の間は冷やうら  
 白幡の城も後从細川の落は攻落まを入道すは討死はと  
 同を念さ弟を比父の吊ひ軍をうると室町家は恨  
 りの位堂をわつておあは思ひきや父入道満祐どのの存  
 命するんといは西は親子の縁の絶果むして今生の  
 對えとげ不貞を免んゆけ身の大を父直は尾尻へ  
 立弑父の号故を禊しなり救奉の不孝の俵せんと死立



共  
三  
五  
傳  
被  
遺  
棄

いく思ひごとく宇都山の巢穴の要害よく一味佐堂の  
 密斗なるえんは究意の地よりとて不日はまりて對面せん  
 との信を聞より今日や翌日やく玉露の目を相倚る老  
 父よりや越さきてつるさるのいふは冨まりしとみそれは後  
 引去るる美義を信ひ先年夜仁の乱は打負る岩を  
 宗全の電長桂九郎門とつるその比君宗全が吊ひ軍  
 をせんとして是も各困を口する亦尾及素名のははよ  
 おかして紀植尔老は出合橋筋る夜の志あやうよ逆  
 の密偵救刺は及び美濃の玉指葉山は要害堅固の  
 巢穴を見定め移又桂九郎門は小川宗全門と仮名して

へは波祐公へ力を添きんと信堂盟書は血判をす人故主  
 山名宗全が女天津妃の美人のきこえありて後依務元が右  
 近く介務家と許嫁有りやど細川の為は滅亡せし山名は  
 あれを仇ある傍あへ天津妃を送らんより信祐公の嫡子信  
 どのと兼えんと妃が去向を尋ひ求め比父の吊ひ合我の天將  
 依固どのと婚姻あまどすくめやど天津妃の貞女両夫よま  
 るるの聖言を守りかく承引てきたれゆへ小川宗全馬が  
 為すはと世の主君の女をれど大なる密書をもつてせし上  
 多きと世よ及びど妃が一命を削死級を持てゆきさうり  
 と父の裡より女の首とりや一霜雲を削が糸よ並又信

より名香くふる包を物に是こそ武田義政より山名宗全よ  
 傳へ天津妃が秘蔵せし日法の花といふ名青物のどく現在  
 主人の妃こそ血判の盟ひを背うに殺害す身程の丈夫  
 夫の宗九弟門加族の上室町家を攻じし四海赤松家  
 は掌握するんは程迫くくの義濃のぬの巢穴へ傳ひやえ  
 其の由は世に出ひは推しおせりげより紀伊老の自筆乃  
 房纏もまへき筆おれども書留の落お事そとては  
 演をひて珍のぬりよひと惜る処は柄の三松あつて  
 立戻り絨首霜雲天所むひ兼て熱想ありし三種  
 が傍の漁父伯寮う女児を糸を棄ひ連ゆんと彼雲が

家を何ぐひしは附こそまを婿に京之介絨首を妻に山  
 の故と袖ひひ又棄りまう舞曲の一卷をぬみえんとけ  
 宇津の少女まゐるより國とひりくまゆりそのより  
 上んとい思ひひや。要害堅固の巢穴まで尋ねあらん  
 るの思ひもまゐり存せずぬん九京の箇主を僥倖し伯  
 寮が宿へ礼をへて女を棄ひつをゆりひと小踊りて昔け  
 きハ霜雲を大巾大ひは雀踊今は始りぬは柄をくま  
 満是せり日法の悪人京平は金屋の天津妃をむこり  
 穢りき死級は流るる書法とも谷川へ打捨りと下知す  
 所へ部下の大勢早九京之介を奪ひ京平はひり

て引立ゆり。今日城首の平よえ余り。旅客尋常のもの  
うらざるこそ。理りあま。つらどや。伯家う家よ。あわく。平並の  
程ハ。く。あう。る。凡早。元京と。つる。もの。く。宛。雲。羽。衣。の  
秘曲。の一。巻。跡。ま。半。分。を。懐。中。に。二。折。り。う。り。ゆ。ゆ。あ。ま。あ。ま  
た。ま。つ。て。搦。め。り。り。伴。の。秘。書。を。奪。ひ。し。て。城。首。の。あ。ま  
指。お。せ。ば。さ。さ。み。り。て。り。と。元。京。之。介。兵。衛。と。い。ふ。あ。ま。目。ち  
又。同。く。繩。目。の。乙。女。が。安。か。ん。る。月。を。く。も。ん。も。礼。を。何。と。も  
ど。ど。と。綱。を。さ。さ。ま。の。伯。ど。や。所。所。と。霧。雲。太。郎。ハ。忠。信。る  
乙。女。が。い。り。め。海。捨。さ。を。今。日。の。い。う。る。昔。日。ど。や。日。以。の。を  
一。町。ま。つ。け。は。荏。爾。一。秋。返。ん。と。都。下。は。今。ど。く。山。海。乃

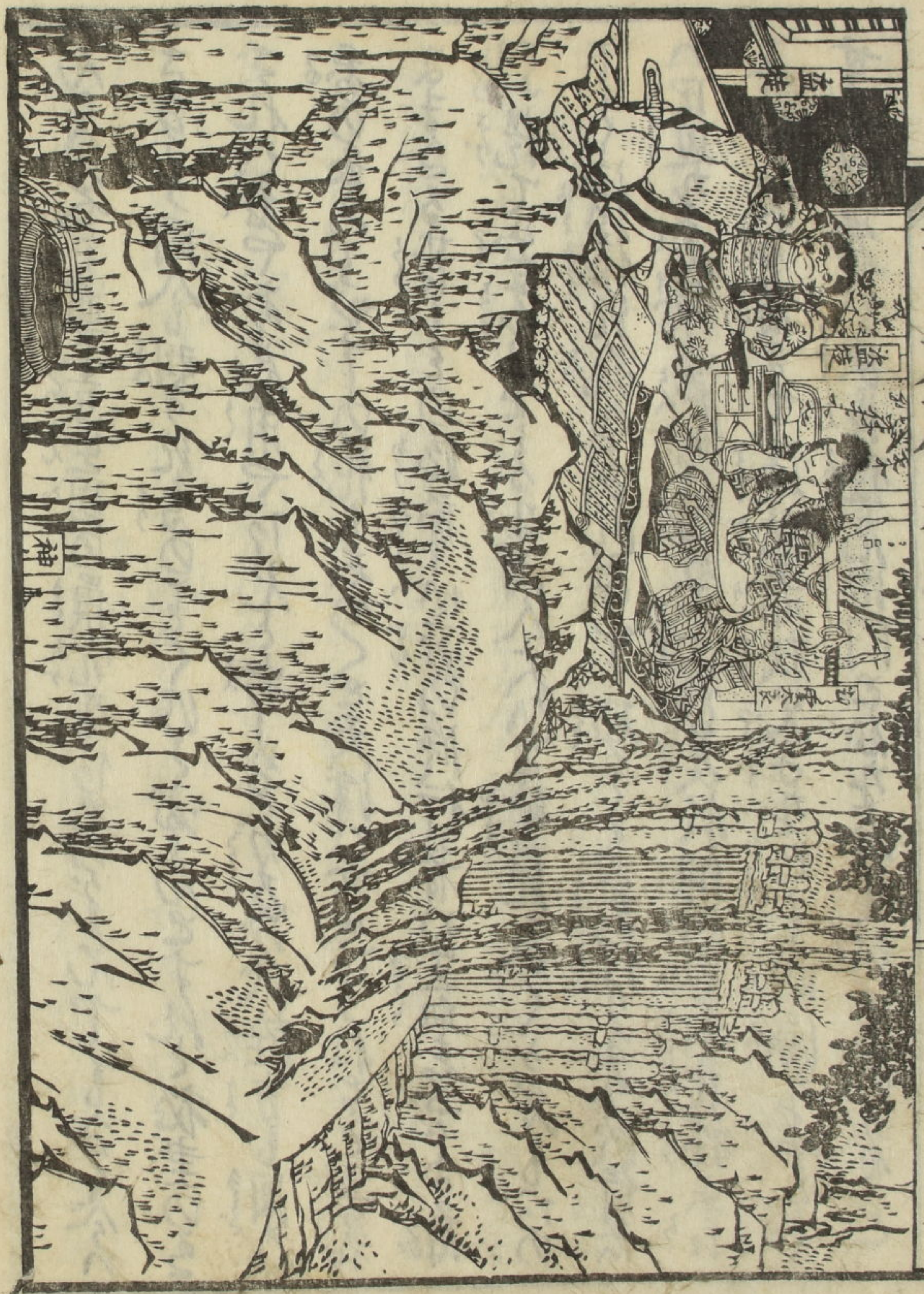
珍味を煮り。献酬。吹。送。を。嫌。り。ど。懐。藉。思。ひ。く。は。飲。喫  
ふ。ら。乙。女。の。一。心。は。惜。し。と。思。ふ。霜。雲。左。衛。父。の。歌。の。か。こ  
と。と。涙。持。と。る。懐。涙。を。扱。り。と。ち。り。切。り。か。を。初。世。に  
左。衛。の。乙。女。を。扱。つ。る。大。や。ら。ら。は。牙。を。か。か。り。く。ハ。片。後  
痛。し。雨。途。及。び。ぬ。る。と。執。念。す。い。ふ。ん。は。は。ら。り。甘。さ。の。こ  
ても。快。樂。を。扱。め。ん。ず。づ。ら。え。う。と。重。し。う。ら。乙。女。の。腕。立  
し。と。控。奥。の。妨。さ。せ。う。は。と。も。元。京。之。介。を。か。は。お。を。討  
取。秘。曲。の。巻。乃。片。り。を。を。棄。く。へ。獨。原。の。家。を。與。え。ん。し  
思。ふ。あ。ま。の。速。く。元。京。の。首。を。劊。乙。女。は。長。月。を。可。半。する。あ。ま  
ハ。今。ま。で。つ。く。哀。倦。し。哀。恨。も。な。せ。ん。け。後。ハ。今。ま。り。の。歌

下鶴の服平素まきと呼ぶ其方奉公の平初は九京糸  
を絞る種く其苦痛をさそひて首を討捨よ又乙女は  
の秘曲は妙なり其眞の醒るは酒宴は二曲の面をせん  
幸ひては日暮るる時はあはれをいへておきて乙女が  
おのゝあはれをいへておきておきておきておきておきて  
くははれをいへておきておきておきておきておきておきて  
晴る庭の古本へ服平は九京が縄をいへておきておきて  
物ささせぬ河津の苦慮をいへておきておきておきて  
あはれをいへておきておきておきておきておきておきて  
ささるる秋風は志む庭の面をいへておきておきておきて

鶴の舞は芳りと乙女は空も空もして清はけ身を過せし  
人を節もさそひ路もサア乙女くとも是月をさするとも  
靡く心はわらや下りてゆへは靡くもつや柳はさくさくの  
声と唱弁はさるる貞節をさくとつとるぬ糸の修行者霜  
雲を扉は打向ひ過刺より是る兩個の光糸をさるるよ  
賊首はさるる宣ふとも水引はさるる小子の思ふおもはるるよ  
少刺は下りては賊首は速く登るる出用をさるるよ  
るべとつては霜雲打るるつとるお伯察の家は傳へて電光  
羽衣の秘曲を奪ひも室町の武林義故は追まへては  
色ども其お伯察の家は夫さるる九京之介居合せてお

文へ一更秘書ひそなの半はん分の家いへに入いると未ま巻まきをたぬぬざりししに  
 りるりべりて日ひを送おくりししに今日けふ足あし柄がらの三さん藤ふじり働はたら  
 きよよううて始はじめ末ま抄しょうひひららば舞ま曲まがを信まずまくく刻きりりた  
 京きやう之の介けいが年ねん齢れいををるるよよかかはは同どうドドククルルハハ風ふう早はや九く京きやう後ごははと  
 穂ほり崎さきよよおおわわくく漁り夫と伯はく察さつ本ほん名なハハ福ふく原げん主しゅ水すい正せい貞てい澄せいはは電でん  
 當あ羽う衣いの秘ひ曲まがを習まなひひししと信まずまくく義ぎ政せいを欺かたりりて事ことを紀き  
 ええハハいいふふよよとといいふふ旅りょ行ぎやう者しや平へいををららしし是こゝ妙まう斗とのの早はやくく上じやう京きやう  
 ありあり多たくく大だい急きゆうせせて其その刃やいばををしし女に九く京きやう之の介けいのの兩りやう人にんをを引ひ立た  
 てて自みづかのの谷やま回まわへへ連つれれてて迎むかへへてて逃のがれれててののせせでで少せう刻こくららくくはは  
 侍さむらいよよとといいひひてて傍かた方はたへへ引ひかかれれたた隙ひまををららばばいいららししはは立た止とど

んとんといいふふもも要よう害がい堅けん固このの巢う穴けつををいいととののままんんややももいいふふ  
 ささららうう兩りやう人にんもも羽うのの影かげののこことといいははくくゆゆんんととすすれれとと秘ひ書しょのの  
 ざざれれハハ老らうややああんん角かくややいいんんととおおややめめどどかか及およびびたた詮せん言ごんもも洞どうろろ  
 家かののままううららびびのの花はなももままれれくくとと天てん津しん乙おつ女にままいいららねねどどもも五ご葉はつ  
 ままままささるる昔むかし一いつのの境かう前ぜんいいちちのの旅りょ行ぎやう者しやハハ生なま血ちままででるる首くび  
 引ひ提ひてて出でままるるををるるはは兩りやう人にん大だいひひにに驚おどろかかれれたた家かくくがが身みももいいつつのの  
 いくいく津しん後ごにに死しををららひひるるゆゆににああららくくもも突つたたりりるるのの旅りょ行ぎやう者しや  
 ハハ足あし邊へをを見みゆゆ声こゑをを潜ひそめめ小こ子こハハ後ご依い細さい川がわのの家か長ちやう祚そ長ちやう  
 三さん八はちとといいるる者ものももてて送おく賊ぞく赤せき松しょう父ふ子こをを巨こゝろ一いつ四し海かいををややききくく  
 せんせんるる山さん名なのの良らう長ちやう桂けい九く清せい門もんとと心こゝろをを合あへへ一いつ引ひ引ひ者ものとと





打拵霜雲太郎が父純正より密更の役と傳り四節旅  
國を都へけりおん斗略せんはた人秘曲の一卷を彼らより  
まるともやぐて首尾せん集めて其方達が故も討しぬさえ  
る早くは地を退き都へ登りて吉丸右を侍ま下として懐  
中より刺身二枚を採りけは一枚の刺身の字が跡の跡は  
おろく部下の懐を抄りておぬ又一枚の是なる死級の  
骸よりけりけりけ者ハ城は深き其の里よおろく乱女問紙  
奪ひ大令は換へ船の眼平とて西堂のするが天網  
のうんぞおりの意ひ日比の恨をぬぎも乱武軍の用くる  
瑞相伝の禪をりの形くくれば追て借らんせんは刺身

を以て友を去んは女の安よてお行ハ清門の終りも六ヶ夜  
男子の打拵をすして又何方か終は二人の夢の心地して  
正しく三種の内神のたまひるおんを遥拜さぬら三八ハ  
部下の善於山は中二つを取ありて兩個はけりさめ  
くと火を息せは電をさるる考のどく花立斗推踊て花  
をうてお行ぬ

二十韻 秘曲の一卷

神樂良二八を二個を首尾よく落して后懐中より日  
陰の花の青色をお極石とて一柱くゆせは青の烟り  
旅家が死級よりつまば不思儀や目殺経経し面交勿地生

るがごとく、珠きく面うし女より似まはせ、僥倖と成る  
 崔瀟又眼平が死級の面の皮を剥取直は霜雲太郎が命を  
 取て女を絨首の平へんと七十三八十四初をそせども更なる  
 引致きは原是、元京之介が養男の命をば元京のそを  
 面の皮を剥て、後徳元形を又せしと、やうり貞操と守  
 りしは、はる形勢はうづれば、固く首を打いと二心の死  
 級を同せり、是れ一應ハ霜雲太郎大ひにあられた、元京の首  
 を討り、のぼれとて女を殺す、のぼれとて怒氣百反  
 又、元京の修行者、賊首の傍は、造りけ不目、大を  
 執して、四海を掌握ある時、三人の美女よりとる、一、時

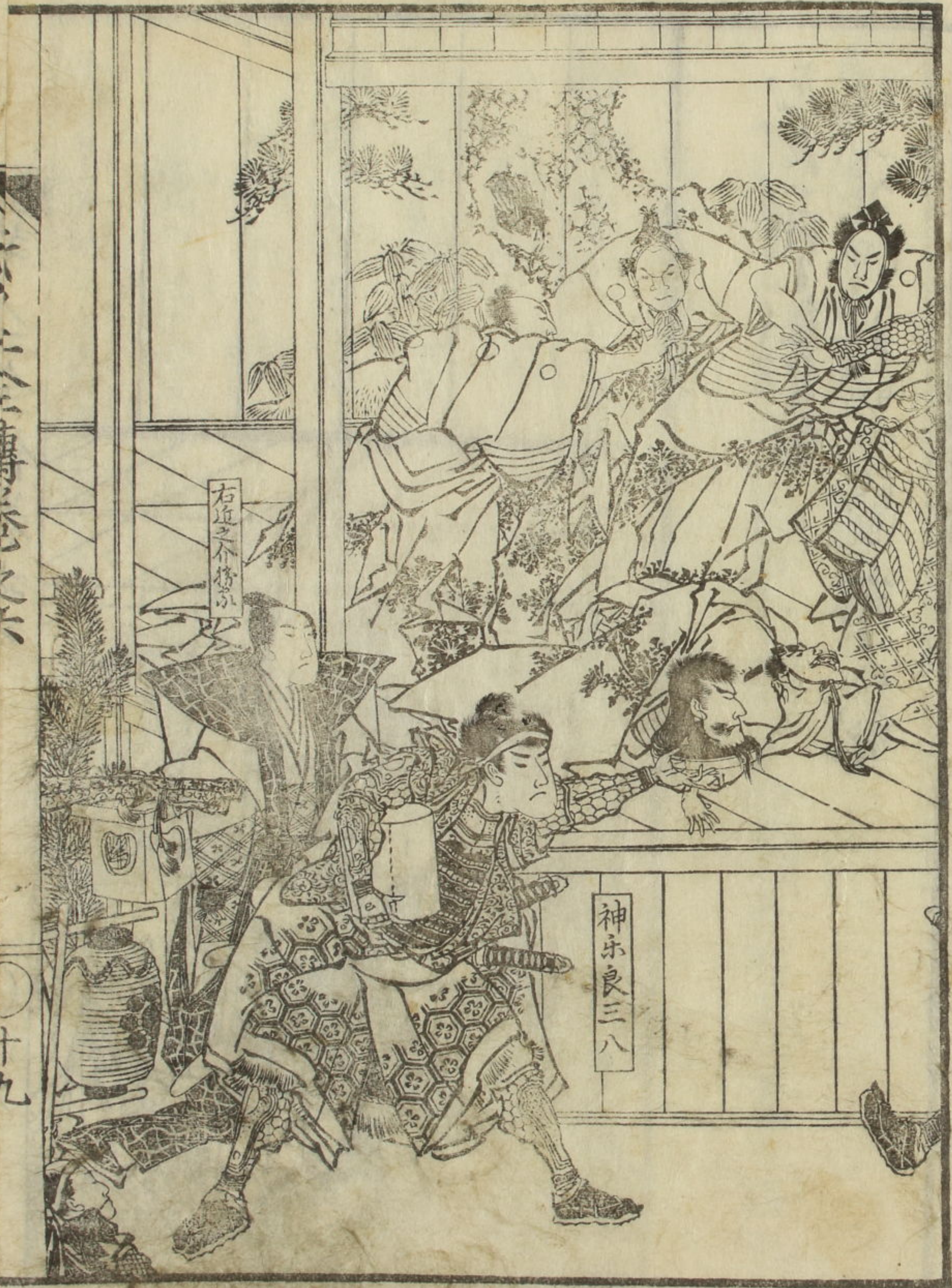
聚めん、はらど、慈き、のら、んや、それ、は、只、一、婦、人、の、あ、ま、か、を  
 奪、り、あ、ま、か、は、是、を、武、將、と、成、へ、き、思、ふ、事、は、あ、ま、か、は、元、京、は、  
 元、京、都、へ、あ、り、妙、斗、の、ど、く、元、早、元、京、之、介、と、名、を、あ、ま、か、の、  
 元、早、羽、衣、の、曲、を、武、林、系、の、故、の、控、見、は、ゆ、ん、と、て、室、町、の、  
 館、へ、こ、ま、年、末、の、誓、恨、を、あ、ま、か、の、あ、ま、か、は、元、早、元、京、之、介、より、稻、葉、  
 山、へ、ま、ゆ、り、げ、う、紀、藤、原、老、の、言、と、一、直、は、大、軍、を、い、て、  
 室、町、を、十、重、十、重、の、取、囲、も、細、川、勝、元、を、始、め、足、利、を、去、り、  
 一、の、殺、一、あ、ま、か、の、あ、ま、か、と、こ、も、あ、ま、か、の、進、る、あ、ま、か、の、  
 一、の、四、つ、結、園、の、八、う、虚、言、を、成、り、宇、津、の、山、の、巢、穴、を、  
 打、立、部、下、の、下、あ、ま、か、の、結、園、を、元、早、元、京、之、介、と、偽、り、て

古今全傳卷之六

十六

室町の館へあり性奉勅勅の差ありて行去お志きさる  
福原主水正貞澄が在家を尋ひ武林の懐く入る福  
典九と習ひゆさるより上きれば兼て和良良三六八川  
宗九清門より内通さるる室町殿の奥大庭は  
糸巻をたつひ端敷は綿辺の御簾をあて武林者  
改る持変をぬけ其介是利家の大小名後从細川  
傍元をとりめ一色六角富樫の一統正波島山勢波の  
んと目を拭ひて侍に程こそあらん四郎祐因肌の美  
しさを唐織の衣をぬき慢く地と舞巻を立出秘書な  
精ん笑る霓裳羽衣の曲をあらん。

それこそこの天をの二神出世のりり人十方世世と  
定りよきい限りもなきまじりて久堅の身とへ名づけ  
す。佐々月宮殿のありさま玉介の料理とくくま  
みて白衣思衣の天人の教を之とまらして二月お  
くの天し女法子を定り候をまじりておも教らる天  
乙女月の桂の身をわてりて東の後行舞世に  
傳へる曲とやびま妙なるよと存りてて  
乃。蕭笛を吹き後死雲の外に  
満く是利の勇力士も物の陰よりけりわを  
「左右と左右他くはむはびのり戸のた袖



右近之介

神乐良三八

秘曲 一卷



右近之介

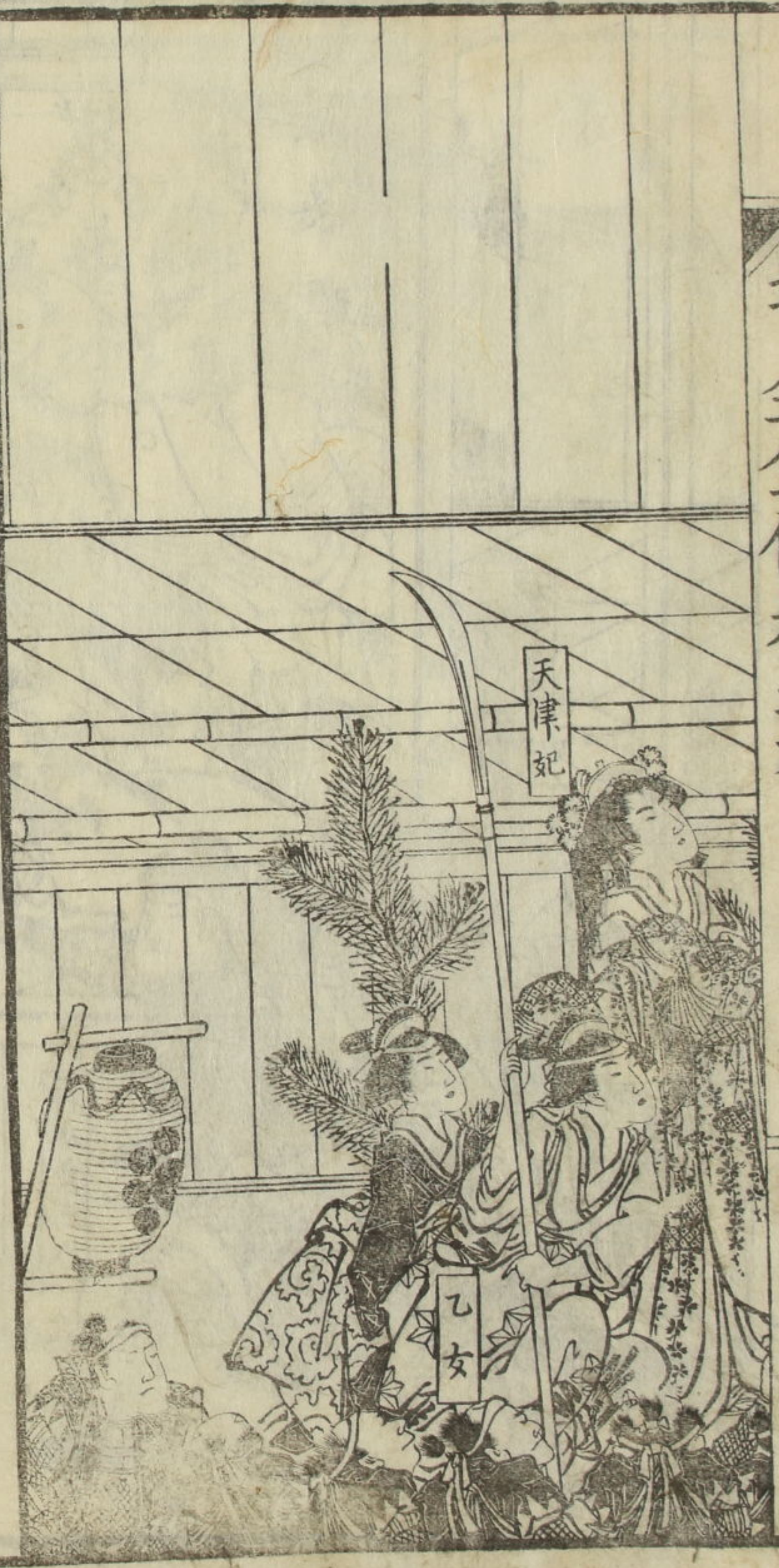
右京之介

北川宗包

細川勝元

九月一日組付を

いづびくもわつにも舞の神



香をうらひ付へを踏入は振

天津四つ子の縁の衣又まきまきの衣の衣を香もゆ

乙女の心なほむのねくま

秘術をうけて平がうませんむもあつとも不敵

二名も月の名入を之五束中のうま又満乳まか

の乳とある

あの日とるどくあく平どりは志る組ひのた勢

去りて時移つて天の衣浦凡まきまきと

穂の松系はあが雲れ足高山やうのころね

あまの持た敷軍馬の青い又満祐。橋架ゆり攻

来る大軍さうんと思ひの外、祢乐良三、八桂、九傳門、逆賊  
化、祢赤、青、打、取、凱、歌、を、あ、げ、て、帰、京、甘、り、と、傳、ふ、る、に  
即、ハ、大、ひ、は、あ、ら、た、ま、る、む、而、た、組、平、の、首、を、お、り、奪、つ、て、生、捕  
と、り、四、海、の、逆、賊、と、ハ、つ、ひ、ひ、ら、ぐ、三、穂、の、浦、の、漁、父、伯、察、実  
右、を、福、原、貞、澄、を、打、つ、る、敵、を、ま、は、と、そ、女、見、乙、女、を、婿、風  
早、九、京、之、介、よ、下、ま、さ、ま、を、尾、を、仇、打、打、秘、曲、の、巻、紙、た、る  
て、福、原、の、家、を、再、興、す、永、く、舞、曲、と、せ、し、傳、介、又、富  
士、九、深、雪、丸、の、御、叔、恙、さ、く、産、物、ひ、ひ、つ、て、山、名、細、川、兩  
家、和、渥、し、右、近、之、介、と、天、津、妃、の、婿、姻、酒、ひ、神、乐、良、三、八  
が、歸、来、お、け、ひ、て、先、知、の、よ、か、加、増、を、終、り、就、家、の、三、松、千、枝

が、善、機、を、強、極、の、に、雪、庵、よ、お、わ、く、秘、ご、ろ、は、吊、ひ、桂  
九、傳、門、を、山、名、家、の、廢、り、し、を、真、个、と、患、心、の、功、を、影、久  
是、と、る、管、領、細、川、修、理、老、夫、勝、元、往、年、尾、及、赤、葉、后、の  
渡、口、よ、お、わ、く、他、人、の、妾、を、打、終、回、海、の、安、危、を、計、り、終、ひ  
足、利、の、御、代、久、堅、の、天、の、羽、衣、ま、ん、ま、き、そ、て、ま、つ、り、も、ろ、れ  
空、言、も、勸、懲、乃、一、助、と、も、り、れ、う、と、御、穂、の、浦、の、松  
の、葉、乃、お、ら、せ、び、と、月、か、度、た、り、を、記、し、お、り、ん、ぬ

キニ全傳後河津卷之六、大尾

浪華

編者 濱松歌國  
画工 一峰齋馬圓

文化十一年戌辰新版目錄

河内木綿團七縞

栗杖亭鬼卯著  
全部五冊

おおく  
幸助

戀夢艫

後篇

同著

全部五冊

酒宴  
即真

舞いこり  
菫昔古

桃田三笑著  
小本全一冊

文化十一年甲戌正月發行

京都書林

吉野屋仁兵衛  
丸屋善七

江戸書林

鶴屋金助

大阪書林

松本屋新助  
河内屋徳兵衛  
海部屋九兵衛  
播磨屋十良兵衛  
河内屋嘉助

